

4.4. 町田 修氏（株式会社スターフライヤー 代表取締役社長執行役員）

「地域の優位性を生かし、稼げる豊かなまちを目指していく」



町田 修（まちだ おさむ）

久留米市出身。

東京大学法学部卒業。

全日本空輸に入社以降、米州室マネジャー兼ロサンゼルス支店マネジャー、財務部副部長、スカイネットアジア航空(株)常務取締役、ANA ウイングス(株)取締役、全日本空輸香港支店長などを歴任。

2022年6月に(株)スターフライヤー代表取締役社長執行役員に就任。

「各々の地域の良い個性から軸づくりを」

中高時代は、県内の久留米で過ごしましたが、当時は「北九州市」と言われても印象が薄かった記憶があります。理由は、「小倉」、「門司」といった、旧五市の個性が色濃くあったことに起因していると思います。すなわち、旧五市のそれぞれの地域が歴史を背負っており、その個性は大事にするべきものであると考えます。

一方、都市を一言で表すと、例えば福岡市を商業都市とするのであれば、北九州市は産業・工業都市と言えます。この産業・工業都市として、旧五市各々の地域の良さをどう活かしていくか。一つの「北九州市」としてのイメージは、「バラバラ感」「あいまいさ」があるので、軸をどうつくるのかがポイントでしょう。

「交通・物流インフラの再構築、産業振興」

北九州市には様々なポテンシャルがあると感じています。一例としては、実は資産を持った方の多い都市ということです。これは培ってきた歴史のなせる業であると考えていますが、門司は元々貿易都市ですし、その他産業・工業都市として、中小企業の厚い経営者層がいるということでしょう。したがって、産業・工業都市として、もう一度軸を再構築してはいかがか

と考えます。

何と云っても、産業がなければ、人は集まってきません。その中、北九州市の特徴としては、学校が多く、また産学連携ができる場があります。人を集め、IT産業などを育成していくことが重要です。軸は産業・工業都市にありますが、このような産学連携ができる点も強みであると思います。

そして、地理的な優位性もあり、特にインフラは強みでしょう。言わずもがな、北九州空港を中心にどう活用していくかといったこともポイントです。

具体的には、直近でいた香港で経験したのですが、熊本をはじめ、九州の農産物がアジアから注目されています。九州はアジア圏という認識で、地理的・経済的な近さもあります。北九州市においては、24時間空港を有し、空港と高速が近く、加えて熊本や大分も近いといった優位性があります。これらを活かした物流拠点としての軸を形成していくことも考えられるのではないのでしょうか。

したがって、北九州空港、小倉駅、門司をはじめとした港を中心として、交通・物流インフラをどう再構築するか、香港などを参考に研究しても良いかもしれません。

例えば、北九州空港を貨物空港として発展させるにあたっては、物流インフラ、特に輸出入貨物については、保税・通関の問題があります。貨物を蔵置するにあたって、現状は貨物を留めておく機能が十分ではありません。そのため、今後、物流施設や機能について、ハード・ソフト両面から、検討が必要となってくるでしょう。その際は、すでに貿易港である門司にはありますが、空港における CIQ（税関・入管・検疫）機能の拡充も視野に入れていく必要があると思います。

一方で、航空貨物は、軽く単価の高いものの輸送に適しています。その需要については、市内に複数の半導体関連の工場があり、熊本では TSMC も操業を始めるなど、大きなチャンスと言えます。さらに、市内への新たな工場の誘致も可能ではないでしょうか。これらを活かして、新たな産業・工業都市としての基盤づくりが重要です。

併せて、企業の既存物流を変えるよう意識していくことも必要です。すでにヤマト運輸㈱が貨物専用機を運航し、空港を活用した新たな物流網を構築する予定となっていますが、その他のフォワーダーの拠点なども市内に持って来るとも考える必要があります。

「稼げる豊かなまちを正々堂々と目指す」

「稼げる」ことは大事であり共感する部分です。「豊か」はありふれた言葉ですが、金銭的な豊かさを意味することが多いと思います。それを正々堂々と言っていくべきではないでしょうか。

歴史的に積み上げてきた産業基盤を活かして、所得水準の高い、豊かなまちを目指す。そうすれば、若い人たちも高い給料で働けるようになる。それだけの素地が北九州市にはあると思いますし、そういった魅力を若い人たちに発信し、認知させていくことにも注力していかなければなりません。

ちなみに文化面については、後からついてくるものだと考えています。北九州市では高齢者も元気なので、それも活かしながら、若い人たちをひきつけるまち、稼げるまちになることが重要です。

人口減少の中で、一世帯あたりの人数は減る一方、世帯数は増加しています。北九州市は暮らしやすいまちであることに間違いはありません。例えば、小倉は東京へのアクセスも良く、非常に便利なまちだと思います。その中で重要なのは、やはり仕事・職場があるか否かでしょう。

その点で企業誘致は欠かせません。昨今、北九州市においても、データセンターや DX の拠点などの開設が実現していますが、既存の企業や研究所の誘致に加えて、起業できる環境づくりも大事です。学研都市等において、それらも芽を出してきているように感じています。このように、スタートアップなどの企業が生まれてくる活気溢れるまちとなっていけば良いですね。

45. 町田 そのこ氏（北九州市文化大使）

「これからはいろいろな文化が生まれる。今後も文化を守り、育つまちであってほしい。」



©中央公論新社

「若者が育つ環境を引き継いで」

大人になってから感じたことではありますが、企業の力や地に根付いてきた産業が引き継がれていき、そこから新しい文化が生まれるということが続いていくと良いのではないのでしょうか。

青春時代を過ごした中で感じた、引き継いでほしいところは、「人の温かさ」です。美容学校を出たので、市内の美容室で働いた経験がありますが、年配の方が若者をきちんと指導してくれました。後進を、若者を育てようという気質があるとすごく感じました。

若者が育つ環境としての北九州市の魅力は、普段生活している場所から路地一本離れたところで文化が生まれているところだと思います。興味のきっかけになる場所が散らばっています。若者に自分たちのまちが、文化や素晴らしい作品を生み出している場所であることを知ってもらえたら嬉しいですね。

「地元を盛り上げる姿勢は素晴らしい」

北九州市は映画化された「52 ヘルツのクジラたち」でもロケ地になりました。フィルムコミッションの皆さんに協力いただいて撮影が順調に進んでいきました。地元の方と映画班を組み、ロケ地を探し回って、私の想像通りであるかを丁寧に確認してくれました。

町田 そのこ（まちだ そのこ）

福岡県在住

「カメルーンの青い魚」で「女による女のための R-18 文学賞」大賞を受賞。また、「52 ヘルツのクジラたち」で本屋大賞を受賞し実写映画化。他著書に「ぎよらん」「うつしが丘の不幸の家」「コンビニ兄弟-テンダネス門司港こがね村店-」「星を掬う」「宙ごはん」などがある。

ロケの際は、古民家に行った時も、女優さんやスタッフさんへ、パンを大量に用意してくださるなど、映画を作ることにとても協力的であるところに感動したのを覚えています。このように、物語や文化をこれからもどんどん作っていくまちになってほしいです。

私の作品の中で北九州市を舞台にしたものが多いのは、当初は取材費が浮くから地元で書いた、というのがきっかけです。小説「コンビニ兄弟-テンダネス門司港こがね村店-」は門司が舞台になっていますが、北九州市でとても売れていると聞き、地元の方に愛されているのだと感じました。今では、物語を書くことで、もっと北九州市を盛り上げることができればと考えています。小説を書くにあたって、地元の方が応援してくれているという安心感がありますし、地域の方々の地元を盛り上げようとする姿勢は本当に素晴らしいと思っています。

「魅力的で明るいまち」

今、北九州市の隣町に住んでいますが、地元の方の応援を受けられるというのも大きな理由です。昔は「都会に出ていきたい」と思っていました。作家として北九州市を見たときも、食べ物や、観光名所、歴史ある市場、魚町のアーケードなどなど、魅力的なものがたくさんあると思います。

幼少期の北九州市のまちと比べると、とても明るくなったように感じます。昔は歩くのに緊張するまちでしたが、気楽に楽しく歩けるまちになっています。子どもも連れて行けるまちにもなっているのではないのでしょうか。東京から知人が来たときも、「ここだけは連れて行きたい」という店があり、自分の手柄ではないのに誇らしくなるほどです。

「文化を守り、育てるまちにしてほしい」

北九州市は、漫画から映画まで、文化を幅広く内包しています。今後もこれまでの文化に加え、新しい文化も守っていけるまちであってほしいと思います。

北九州市を取り上げる作家が増えると良いですし、映画などでも北九州市を舞台となると良いのではないのでしょうか。聖地巡礼にもつながりますし、物語のまち、というのも良いと思います。

北九州市でのオールロケの映画「レッドシューズ」では、どのシーンもとても絵になっていました。どの場所を切り取っても良いまちで、映画のロケ地としてのポテンシャルを改めて感じました。

文化では他にも、北九州市立文学館では林芙美子文学賞なども開催されていますし、もっと周知されていくと良いのではないのでしょうか。審査員には、川上未映子氏など、著名な方が名を連ねています。すでに文学が生まれている場所ではありますが、もっともっと文学が生まれてくると良いですね。

これからもいろいろな文化が生まれてくると思います。文学を生み出す人はこのような賞から生まれることもあるので、文化が育つまちとして、今後も取組を大きく広げてほしいと願っています。

46. 松永 守央氏（公益財団法人北九州産業学術推進機構 理事長）

「新たな産業が生まれ、企業や人が集まるまちを目指してほしい」



松永 守央（まつなが もりお）

大阪府出身。

工学博士。専門は電気化学。

京都大学工学部卒業、大学院工学研究科工業化学専攻博士課程修了。

1978年から九州工業大学で教鞭をとり、2010年に学長に就任。

2016年から現職。

「人々を惹きつける豊かな自然」

北九州市の豊かな自然は、市外の人を惹きつける魅力があります。一方で、北九州市をより住みやすいまちにするという観点では、観光客にとって魅力的な環境と、居住者にとって魅力的な環境について、異なる視点から考える必要があります。

例えば、平尾台のカルスト地形のような自然は、「観光客への訴求力を持つ観光資源」ですが、居住者にとって重要なのは、「豊かな自然がもたらす心の安らぎ」だと思います。北九州市に住みたいと思う人を増やすためには、そこを前面に出してアピールすると良いのでしょうか。

「レトロな雰囲気を楽しめるまち」

北九州市には、昔ながらの魅力的な飲食店や商店が現在も多くあり、レトロな雰囲気を楽しむことができるまちです。

一方で、昔ながらの個店は、経営のあり方も昔ながらの方法であることも多いため、生産性の向上が課題となっています。電子マネーの導入など、生産性向上に向けた取組を複数の店舗で協力しながら進めていく必要があると思います。

「新たな産業の創出が重要」

日本全体で人口減少が今後も続くことが予測される中、DXをはじめとする新しい技術を活用して、生産性向上を図る必要があります。

また、既存の産業の生産性を向上させるだけでなく、成長が予期される新たな産業の創出を推進することも重要です。

行政、商工会議所、その他経済団体等が連携して、GX、DX、AI等の最先端の分野の産業を育てていかなければなりません。北九州市は、市内に大学が多く立地していることもあり、若者が集まるまちです。これを生かして、次の世代を担う人材の育成に力を入れることが重要です。

併せて、北九州市の方向性にマッチするベンチャー企業に重点的に投資し、新たな産業の育成を図るとともに、そのような企業を市内に定着させるためには、企業で働く人々の衣食住も含めた生活環境をより魅力的なものにする必要があるでしょう。

「優秀な人材が集まるまちに」

かつての官営八幡製鐵所とその関連企業群には多くの優秀な人材がいました。しかし、製鉄業の衰退に伴い、最先端の産業に従事するために他の地域にそのような人材が流出してし

まいりました。

再び北九州市が全国から優秀な人材を集めるためには、「最先端の産業が営まれているまちである」というイメージをつくり、発信していくことが重要であると思います。

「多様な人々が活躍できる環境づくり」

北九州市の課題の一つに、ダイバーシティ（多様性）とインクルージョン（包摂）の推進が挙げられます。

働き方の多様性の観点では、新型コロナウイルス感染症の拡大も要因の一つとなり、社会全体でテレワークの普及が進み、働きやすい環境の整備が進みつつあります。このような動きに合わせて、北九州市でも、女性や外国人など多様な人々が働きやすい職場づくりを推進することが重要です。

「九州の玄関口としてのポテンシャル」

現在の北九州空港の貨物取扱量は、まだ、福岡空港より少ないですが、今後、さらに自動車物流の人手不足が深刻化する中、物流における航空や船舶の役割は大きくなるでしょう。その点、空港も港湾もある北九州市は、九州の玄関口としてのポテンシャルを有していると言えます。

また、アジアへの近さも北九州市の強みです。北九州市の医療・福祉の集積をアジアの富裕層向けにアピールすることで、医療ツーリズムなどの観光客を呼び込むことができるのではないのでしょうか。海外の富裕層を呼び込むためには、質の高い宿泊施設が市内にあることが重要であるため、そこが課題と考えます。

「北九州経済圏の先頭に立つまちに」

これからのまちづくりを進める上で、限られた資源を効率的に活用するためには、重点的に投資すべきところを見極めなければなりません。

北九州市は五市対等合併により生まれたまちであるため、現在の人口規模等も考慮しながら、既存の公共施設等の配置の見直しを行う必要があります。

また、福岡県の東部は、北九州経済圏となっています。社会全体で人口減少が進む中、周辺自治体と連携した政策展開を行うことが重要です。その中で、北九州市がその先頭に立って、取組を推進していくことを期待しています。

4.7. 三谷 康範氏（国立大学法人九州工業大学 学長）

「不可能を可能にする『チャレンジなまち』であってほしい。」



三谷 康範（みたに やすのり）

愛媛県出身。

大阪大学大学院工学研究科修了。工学博士。

大阪大学工学部助教授、米国カリフォルニア大学バークレー校客員研究員等を経て、九州工業大学工学部電気工学科 教授に就任。

2022年4月から、九州工業大学学長。

「成功体験を現在の視点で引き継いでいく」

北九州市は歴史的に、かつての八幡製鐵所等近代産業における成功や公害克服等の成功体験が蓄積されています。それらの歴史は大切にしなければならぬ一方で、過度に引きずられ、そのモデルと同じように行えば成功すると考えてしまうと発展は無くなってしまいます。

今の世の中では、過去の成功体験をどのように置き換えれば成立するのかといったことを考え、引き継いでいくのがポイントです。例えば、過去の製鉄業の発展を、今成立する話に置き換えると、「再生可能エネルギー」「循環リサイクル」「長寿イノベーション（長寿社会における社会課題に対応するためイノベーションをどのように起こしていくのか）」といった考え方の重要性に気付くことができます。つまり、過去のモデルに、ものづくりの基盤とDX、AI等を付け加えて、どう新しい発想に置き換えていくのかというところに尽きるのではないのでしょうか。

今後、少子高齢化などの社会課題について、先進技術を掛け合わせることで解決するにあたって、その技術の組み合わせは思い切ったものである必要があります。

北九州市には、社会課題がたくさんあることに加えて、ものづくりの技術もあるため、北九州市を社会実装という観点から考えると様々

な実験ができるポテンシャルがあると考えています。

「社会基盤を活用し、圏域としての発展を」

ある時期、このまちは、日本の中心として機能していたという経緯もあり、病院などを含め様々な社会基盤が揃っています。よく比較対象となる福岡市は、都市インフラとして圧倒的な力を持っています。北九州市は、そこに隣接・接続している価値を生かし、ともに発展するという方法をとれば良いと思います。

また、企業にとって労働力・技術者の不足が大きな社会問題になっている背景もあり、外国人材の活用を進めていく必要があります。その中で、住居費の安さには、外国人材を呼び込む際に大きなアピールポイントになるのではないのでしょうか。

今後、企業とうまくタイアップし、大学を活用して技術者が学べる環境を整え、地域に根付いていただくとともに、地域の方々も、もう一度大学で学ぶことができる仕組みをつくることができれば、都市の価値は上がっていくと考えています。

「大学も活用しチャレンジできるまちづくり」

大学としても、今後、色々なことを試すことができる場をつくっていきたいと考えていま

す。例えば、スタートアップが何かを試行する際に、社会実験として様々なことにチャレンジできるようにすれば、おのずと人が集まってくるのではないのでしょうか。

また、これまでも市の支援により、民間企業の実証が可能となった成功体験があります。今後も行政として特区制度の活用による規制緩和をはじめとして支援し、「北九州市なら新規ビジネスの規制をクリアできる」、「北九州市に行けばなんとかなる」というイメージがより強固にできれば、圏域全体の発展にもつながるのではないのでしょうか。

「GX と街のコンセプトで企業誘致を」

GX は現在の方針で進めていけば良いと思います。将来を見据えると、脱炭素の経営をしなければ、企業価値が下がる時代となると考えています。従って、脱炭素、安価な土地代といった企業誘致の条件を整えていくことが大事になるのではないのでしょうか。

企業誘致にあたっては、あえてターゲットを絞らずとも、「挑戦できるまち」のコンセプトさえしっかりしていれば、自然と企業が集まるものと考えています。

単に「災害が少ない」ではなく具体的な数値実績ベースで発信をしていくことが大切です。

「DX、AI を進めることで社会課題解決へ」

DX、AI をいかに使えるものにもっていくかが問題です。ある分野に DX、AI を導入しようとするとう規制の障壁が発生しがちですが、それを打ち破ることができれば「挑戦できるまち」は必ず出来上がります。特に医療・交通分野についてはかなり規制を打ち破る必要があるでしょう。

また、DX、AI を導入するにあたって、社会課題を解決できる手段として、市民を巻き込んだ形で取組を広げていくことが望ましいと考えます。参加する人にも価値が生まれることで、

「DX、AI を試せるまち」という他ではできないこととして差別化できれば良いですね。

行政としては、規制のクリア等に関してサポート体制を構築していくことが重要です。市と一緒に解決してくれるという姿勢を見せれば、相談は来るはずで

す。新しい取組を企業もビジネスチャンスだと捉え、実証実験等に協力するなど、過去の慣習や文化に縛られすぎることなく、イノベーションを生み出すようなまち全体としての雰囲気醸成することが重要だと考えています。

「挑戦できるまちとして好循環を生み出す」

市内の大学生は、少なくとも4年、長くて9年もの期間、若い時代を北九州市で過ごすことになります。その際に「北九州市」にいかにか共感をもって関わってもらおうのかといった点を大切にしなければなりません。

また市内で大学時代を送った方は、他のまちに移り住んでも北九州市で過ごしたことを覚えています。若い方々にとって、新しい挑戦ができるという雰囲気があるならば、帰ってきてくれる可能性があると思います。そうすれば、帰ってきた方々と学生で、さらに新しいことができるといった好循環につなげることができるのではないのでしょうか。

現在、当大学ではベンチャー約3社にオフィスを貸し出し、学生もそこで働くなど、小さくはありますが好循環が生まれています。これをまち全体の好循環につなげていくことができれば良いのではないかと考えています。

「不可能を可能にするチャレンジなまち」

単独では難しいようなことであっても、北九州市に来れば、周りのサポート環境が整っていて、必ず実現できるといった、「不可能を可能にするチャレンジなまち」であってほしいと思います。

48. 三井 康誠氏（株式会社三井ハイテック 代表取締役社長）

「ものづくりの歴史だけでなく、基盤が今でもあることが北九州市の財産。

最先端のものづくりで世界に発信し続けていきたい。」



三井 康誠（みつい やすなり）

北九州市出身。東京大学大学院 工学系研究科修了。カリフォルニア大学バークレー校 経営大学院修了。株式会社三井ハイテック入社。金型事業本部長や技術開発本部長、常務、副社長を経て、2010年4月から同社代表取締役社長。

「最先端のものづくりで世界に発信」

北九州市の財産は、ものづくりの歴史だけでなく、基盤が今でもしっかりと残っているところだと思います。ものづくりのクラスターがあるからこそ、様々な企業と連携しながら、世界と戦うことができる工業製品を輸出したり、生産設備を各グローバル拠点に配置したりすることで、競争力を持って世界展開できていると感じています。

また、北九州市にはものづくりをリスペクトする文化があると思います。競争力の核となっているのは、「最高の設備」、「最高の技術」、そして、「最高の技能」です。「北九州マイスター制度」のように、技能に対して表彰する制度があるというのは、自分の努力が認められるという点で、とてもモチベーションにつながっています。

北九州市のものづくり企業は、はじめから世界を市場として見据えています。世界的に通用する製品を作ることができる企業を活かして世界と戦っていくこと、これが大切なのではないのでしょうか。

「情報産業など様々な産業の呼び込みを」

競争力を持って、世界と戦っていくためには、情報を集め、効率的にものづくりを行う必要があります。そのためにも、情報産業など様々な産業が必要となります。

様々な産業の呼び込みや学校・研究機関の活用は、行政がイニシアチブをとって、進めていただけるとありがたいです。

「ヒト・モノ・カネの最適な配置を」

北九州市には、五市対等合併という歴史がありますが、企業経営でも同じですが、今後は、力を分散させるのではなく、時代や環境に応じて、最適な形に再配置をしていくことが重要だと思います。

北九州市の七区には、響灘や平尾台、門司港レトロなど、それぞれ魅力的なところがあります。それらを活かして、それぞれの色を出した特徴的なまちづくりを進めていくとよいのではないのでしょうか。

「他市にはない魅力を活かした発展を」

新幹線の「のぞみ」が停まる小倉駅があり、博多まで15分で行くことができます。確かに、福岡市は商業都市として栄えており、勢いもありますので、その力を借りながら発展していくことも考えられます。

北九州市としては、どこにでもあるものは福岡市に任せて、超ローカルなものを極めていった方がよいのではないのでしょうか。且過市場などローカルなよいところがたくさんありますが、それぞれが個々にひっそりとやっている印象を受けますので、それぞれを繋いで、人を呼び寄せる魅力のある場所にできるとよいでしょう。

また、福岡市は土地が高騰していますが、北九州市では福岡市と比べて住宅や家賃が安いなど、生活費が安いところも魅力の一つだと思います。ただ、公共交通の面で、中心部と周辺部のアクセスに課題を感じていますので、そのあたりが改善されるとよいのではないのでしょうか。

ものづくりの面で言うと、昔から製鉄業の企業が24時間操業してきたことから、人々の夜勤に対する抵抗が少ない都市だと感じます。地元にいるとあまり気付かないかもしれませんが、夜勤に対する抵抗が少ないことは、最新鋭の設備を導入しても、夜勤により稼働率をあげることができるので、設備投資もしやすく、ものづくりのまちとしては、他にはない強みだと感じています。

「『ものづくり』のまちとして」

『ものづくり』のまちとして、産業が栄えていくことが重要だと思います。そのためには、世の中がDXなど変わっていく中で、新しいニーズに応えられるものを供給できるハードを作っていかなければなりません。

また、若年の間に、海外で活躍した技術者が年齢を重ねて北九州市に戻り、地元で活躍

できるようなまちになると、まちにとっても、その人の人生にとってもよいことなのではないでしょうか。北九州市の学校を卒業する学生も、卒業後、域外に出ずに地場で就職するようになると、その後も北九州市で生活の拠点を構えてもらうことが期待できます。最近では、IターンやUターン就職の方も多くなっていますが、住んでみると結構住みよいという声をよく聞きます。

子育ても含めて、安心して暮らせるまちになっていくことを心から願っています。

49. 棟安 正人氏（北九州ホテル協議会 会長）

「誰もを受け入れ、『選ばれるまち』『優しいまち』へ」



棟安 正人（むねやす まさと）

兵庫県出身。

リーガロイヤルホテル東京、リーガロイヤルホテル大阪等を経て2021年リーガロイヤルホテル小倉 副支配人。

総支配人を経て、代表取締役社長（現職）。

北九州ホテル協議会 会長。

「リーダーを中心としたまちの活性化を」

ホテル協議会では北九州市の宿泊施設全体の活性化に取り組んでいます。北九州市で一番客室数が多いのが「西鉄イン」、宴会場を含めて規模が一番大きいのが「リーガロイヤルホテル小倉」ですが、それらは小倉駅周辺に集中しており、市全体として大きなホテルが少なく、ビジネスホテルが点在しているのが現状です。

五市対等合併ではありますが、北九州市は広い地域に跨っており、小倉以外のエリアまで地域活性化が届いていないと感じています。さらなる活性化のためにはリーダー的な存在が必要ではないでしょうか。

「人を受け入れる度量、ポテンシャルを生かし動き続けるまち」

多様性を受け入れるまちということは、将来も引き継ぐべきではないでしょうか。人を受け入れる度量はとても重要です。

かつて北九州市は、公害のまちでした。今では洞海湾も多くの魚が住むきれいな海となり、水道水も綺麗になりましたが、そのような歴史が世間一般に伝わっていません。このような困難を克服したという経験や底力はポテンシャルとしてもっと生かすべきだと考えます。

また、北九州市に住んでいると、改めていろいろな施設が整備されてきて、生活レベルが上がってきていると感じます。宿泊特化型ホテル

の事業者目線でいうと、まちが動けばお客さまが増えます。何かを動かすことによってまちは活性化します。そのため、北九州市は常に動き続ける必要があると思います。

「新たな層を誘客できるホテルが必要」

ホテル協議会に参画する施設は市内に点在しており、2023年は30施設です。参画施設数の減少もありますが、ビジネスユース主体のホテルが中心であるため、宿泊者数等はコロナ前の2019年とあまり変わっておらず、他の自治体と比べてもとても低い水準です。ビジネス向けの施設は飽和状態ですが、北九州市が観光に力を入れるにあたっては、5つ星ブランドのホテルが市内にできれば、新たな層のお客さまの獲得も可能となるのではないのでしょうか。

「高単価のインバウンド誘客に向けた仕掛けづくり」

インバウンドはFIT（個人旅行）化が進んでいます。高いお金を払ってでも北九州市に来るといふサイクルができていません。お金を出しても見合う価値があると思えるような海外への発信が必要だと思います。

そのため、インバウンドを呼び込むための仕掛けが必要です。京都がオーバーツーリズムに悩まされている中、NYタイムズが「2024年に行くべき52か所」で世界各地の旅行先で山口

市を3位に取り上げました。小倉駅から新山口駅まで新幹線を使えば2駅です。そう考えると、地理的なポテンシャルで北九州市を選んでもらえる可能性も高いと思います。

「メガチェーンの誘致や投資喚起が必要」

長崎市は元気があります。「マリオット」「ヒルトン」「IHG (ANA)」の3メガチェーンが世界で頭一つ抜けていますが、「マリオット」が長崎駅前が開業することで、このメガチェーンが揃うことになりました。さらに、2024年の秋頃には「ジャパネットたかた」が、新たなサッカースタジアムに併設する形で、約250室のホテルを開業します。そういった面で非常に注目が集まっているのです。

福岡市でも、「ザ・リッツカールトン福岡」が開業し、プライベートジェットで来ている宿泊客がいらっしやるという話も耳に入ってきています。

メガチェーンは、それぞれが会員組織を持っており、これまでとは違うお客さまが来るようになります。しかし、北九州市には立地していないので、海外の方が検索すると北九州市は宿泊先としてヒットしません。市内で星が付いているホテルは「リーガロイヤルホテル小倉」のみです。北九州市ほどの規模でそのような状況の都市は少ないのです。ビジネスライクなまちという印象がついてしまっていると感じます。

世の中では、高いデザイン性や宿泊以外の付加価値等を有する「ライフスタイルホテル」が流行しており、「日航」や「無印良品」が地方に進出してきています。「星野リゾート」も「OMO」ブランドで下関市に展開するようですが、北九州市に来て良いと思います。地道な接点をつくっていくことが大事です。

森トラストも「ホテルインディゴ」を長崎に開業します。ブティックホテルですが、古い建物をリノベーションし、24年の冬に開業予定です。このように投資家がホテルを出したくな

る地域になることが必要ではないでしょうか。

「ホテル誘致が必要だという共通認識を」

宿泊特化型は建設しやすいですが、インバウンドを組み込んでいくためには、さらなる施設が必要になります。行政・業界・地域が連携し、意識を共有することが重要です。

北九州市は、風光明媚な千畳敷などがある若松北海岸や「星野リゾート」と同じ発想で、門司も誘致するのにポテンシャルの高い立地を有しています。メガジップラインの話もありますし、海や山といった自然が豊富で、門司港レトロというブランドもあり、素晴らしい所です。

「インフラ整備、若者の仕事づくりを」

小倉に重要なのはインフラの整備です。小倉を中心として、扇状に五市全体がつながっている状態、例えばモノレールが全市に網羅されているようなことを目指してほしいと思います。

また、都会へ憧れて出て行く人もいれば、都会生活に疲れている人も多くいます。地元出身者が帰ってくる形で人口減を回避できる糸口がそこにあると考えます。そのためには若者の仕事がたくさんある状態をつくるのが大切です。リモートで居住地を自由に選べる仕事も増えています。北九州市は、住みやすさ、子育てしやすさが魅力ですので、そこを推すべきではないでしょうか。

「選ばれるまち、そして優しいまちへ」

「若者が帰って来ることができる」、「地元でなくても受け入れてくれる」といった要素を備え、「選ばれるまち」「優しいまち」を北九州市は目指すべきだと考えます。誰しも受け入れる安心なまち、くつろげるまち、その意味では北九州市は、東京のようなお洒落なビルが並べば良いということではなく、ハイブリッドなまちになると良いのではないのでしょうか。

50. 森田 隼人氏 (シャボン玉石けん株式会社 代表取締役社長)

「九州第二都市である自負を持ち、委縮することなく、人口減少を食い止め、
ふたたび『活気あるまち』へ」



森田 隼人 (もりた はやと)
北九州市出身。
専修大学経営学部経営学科卒。
大学卒業と同時にシャボン玉石けんへ入社。関東エリアの卸店、百貨店、スーパー、ドラッグストアチェーンなどへの営業に携わった後、取締役副社長などを歴任。
2007年に代表取締役社長に就任。

『環境』はしっかりと引き継いで

北九州市と言えば、公害時の「七色の煙」で覆われた空、「死の海」とも表された洞海湾が劇的に改善し、青い空、青い海を取り戻した歴史でしょう。あの対比は対外的にもインパクトがあり、周囲からの評価が高いと感じます。

このように「環境」の取組は、北九州市にとっての大きなブランドであり、しっかりと引き継いでいくべきだと考えています。当社も、そういった意味で親和性が非常に高く、その北九州市の環境関連企業の一つとして認知いただいております。就職先としての関心が高まっていると感じています。まずは知ってもらうということが大事だと思うので、この現状は、北九州市をはじめ、世の中が変わっていく原動力として、環境ブランドの発信に貢献できているのではないかと考えています。きっと北九州市の企業でなければ、「無添加石けん」の製造・販売を行うことも、環境負荷の低い「石けん系消火剤」の誕生もなかったでしょう。

一方で、「環境」だけでは食べていくことは難しい面もあり、まちの活性化のためには、プラスαの工夫が必要でしょう。

そのような中で、北九州市の特徴としてよく

言われるのが、他所から来た人を受け入れることに寛容であることです。

例えですが、「北九州に来る支店長は2度泣く」と言われます。一度目は転勤先としての「心配」、二度目は離れたくない「名残惜しさ」で泣くそうです。排他的な気質でないことは、まちの活力を上げていくために必要だと思います。

「強みをいかし、発信することが必要」

ポテンシャルとして、生かせる部分はたくさんあるものの、生かしきれていない。北九州市にはBtoBの企業が多いからか、発信力が弱いように感じています。積極的に発信すれば、よりうまくいく可能性があるのではないのでしょうか。また、新幹線は小倉駅に全て止まり、空港もあり、港もありますが、このような環境を生かしきれていないように思います。

今後、将来性を感じるのには、物流拠点としての北九州空港でしょう。東京と上海の中継点としての地理的位置づけもあります。より、活性化するには、福岡ともうまくやっていく必要があります。北九州空港は第二福岡空港などとして、一緒に成長していけばよいのではないでしょ

うか。

また、北九州市は、医療・福祉が充実しています。加えて、各区それぞれに立派な施設があり、「子育てしやすいまち」No.1になっているのも長所です。「高齢者の住みよいまちNo.1」はわざわざ表現せず、若者の住みやすいまちが、結果的に高齢者が住みやすいまちになれば良いと思います。

その他、BCPなどの観点でも、ハザードマップで見て安心な立地であり、災害に強く、水も豊富にある、交通インフラも充実しているということは重要で、企業誘致においてもメリットがあると思います。

加えて、北九州市役所の職員の方には熱意があって、他自治体とは違うという印象を持っています。このような行政のスタンスも非常に大事ではないでしょうか。

「魅力的な地元企業へ、活気あるまちに」

再び「活気あるまち」になってほしいという思いがあります。大学から戻ってきて、魚町商店街を歩く人が減っていると感じました。稼ぐことができれば人も来ますし、満足度も上がってきますので、ぜひ達成してほしいです。

そのためにスタートアップと地元企業の技術力を掛け合わせることが必要です。北九州市に大学がいくつもあるが、大学生の多くは卒業後、市外に出て行ってしまっています。地元企業が魅力的に映っていないのではないのでしょうか。地元企業がしっかり収益を上げれば、そのような人たちを食い止められるのではないのでしょうか。せつかく北九州市にきて、住みやすいまちとして感じているのに出て行くのはもったいないと感じています。

「九州第二都市として萎縮の必要はない」

私が小さかったころは本当に人が多かったという印象があります。一市民としても、人が来なくなる、住みなくなるまちにしていきたい

と思っています。

北九州市は、なんといってもまだまだ九州第二の都市です。萎縮する必要はありませんが、ここで人口減少を食い止める必要があるでしょう。やはり「人口」は重要ではないでしょうか。